

今月の

数字

120倍

(最新植物工場の露地栽培に対する
レタス栽培効率)

松田 恭子

Profile まつだ・きょうこ ●日本能率協会総合研究所で公共系地域計画コンサルタントとして10年間勤務後、東京農業大学国際食糧情報学科助手を経て農業コンサルタントとして独立。実需者と生産者の連携の仕組みづくりや産地ブランド戦略を支援している。日本政策金融公庫農業経営上級アドバイザー試験合格者。株式会社アソシエイト代表取締役。

農林水産省が12月10日に発表した2018年産の水稻の全国の作況指数の確定値は、「やや不良」の98となった。北海道は90で「不良」、コメどころの秋田(96)、山形(96)、新潟(95)がいずれも「やや不良」と目立った。飲食店に販売している米穀店に話を聞くと、業務用米不足・割高感に加えて、コメの品質があまり良くない産地もあり、これまでの取引関係を変更する必要も出てくるということだ。

コメは、平年値に対する収量が2%動いただけでも大騒ぎになるが、畑作物の収量の変動は大きい。2割くらいは平気で変わる。例えばバレイショは、1997～2006年の10年間で最大値に対する最小値の割合が84%、2007～2016年でも84%となっている。それによって、価格の変動も大きくなり、2007～2016年の間では最大値に対する最小値の割合は53%にまで落ち込んでいる。

土物のバレイショほどではないが、キャベツやレタスなどの葉物野菜も変動がある。1997～2006年までの期間では、キャベツの数量で89%、レタスの数量では92%の開きがある。しかも、これらの数量の開きに比べた価格の開き(キャベツ・レタスとも59%)が大きい。バレイショと異なり、長期間の貯蔵に向かない

キャベツやレタスは、わずかな数量の変化でも価格に大きく響くためと考えられる。

そのためもあってか、植物工場が再評価されている。2019年1月に、セブン-イレブン・ジャパン向けのレタスを1日7万食・3t規模を生産する植物工場が稼働し、神奈川県内や東京都内の約1,500店にサラダなどを供給する。三菱ガス化学は2019年春に20億円以上を投資して福島県にレタスなど葉菜類を1日2.6t生産する。キャノンとバイテックホールディングスは、2020年度に石川県で1日12万株、年約4,400tの植物工場を整備し、既存工場を合わせ27万株(年9,900t相当)の供給を目指す。植物工場を運営するスプレッド(京都府)は、亀岡市の既存工場に加え、2018年に木津川に関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)で1日3万株のレタスを生産する工場を建設した。亀岡工場は黒字化までに7年かかったが、そのノウハウを生かし、新工場では収量が1年1㎡当たり648株と、露地栽培5株の120倍まで栽培効率を高める。これらの計画だけで、レタス流通量の2.6%程度を占める。安定供給を求める市場ニーズのもとで、植物工場が普及し持続するかは、大規模化だけでなく栽培効率がカギとなってくる。

表 卸売数量・価格の10年変動

			バレイショ			キャベツ			レタス		
	数量	トン	最大値	最小値	最小値/最大値	最大値	最小値	最小値/最大値	最大値	最小値	最小値/最大値
1997～2006年	数量	トン	921,953	775,188	84	1,547,142	1,375,920	89	652,292	596,890	92
	価格	円/kg	135	83	61	118	70	59	256	151	59
2007～2016年	数量	トン	765,049	640,425	84	1,424,643	1,352,762	95	608,180	563,050	93
	価格	円/kg	177	94	53	101	76	75	214	158	74

農林水産省「青果物卸売市場調査」をもとに作成